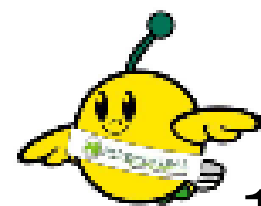
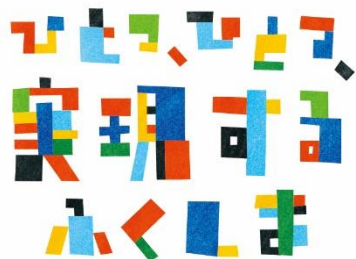


森林における放射性物質の 状況と今後の予測について

- 1 モニタリング調査の進め方
- 2 令和3年度調査の結果
- 3 放射性物質の動態変化
- 4 まとめ



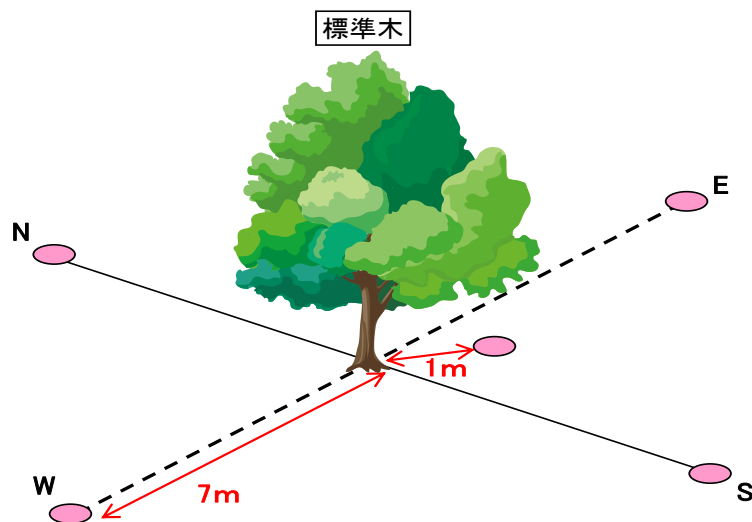
調査箇所数の推移

年度	調査箇所数	調査項目の内訳				調査実施主体
		箇所数	空間線量率	樹木のCs濃度	樹木(部位別)土壤等のCs濃度	
平成23(2011)年度	362	362	○			県(直営)
平成24(2012)年度	925	785	○			県森林整備加速化・ 林業再生協議会 (補助)
		90	○	○		
平成25(2013)年度	1,006	50	○		○	県(委託)
		849	○			
		81	○	○		
平成26(2014)年度	1,193	76	○		○	県(委託)
		1,117	○			
平成27(2015)年度	1,230	76	○		○	県(委託)
		1,154	○			
平成28(2016)年度	1,250	71	○		○	県(委託)
		1,179	○			
平成29(2017)年度	1,300	81	○		○	県(委託)
		1,219	○			
平成30(2018)年度	1,300	81	○		○	県(委託)
		1,219	○			
令和元(2019)年度	1,300	81	○		○	県(委託)
		1,219	○			
令和2(2020)年度	1,300	81	○		○	県(委託)
		1,219	○			
令和3(2021)年度	1,300	80	○		○	県(委託)
		1,220	○			

※Csは放射性セシウムの略

※調査地の樹種はスギ、アカマツ、ヒノキ、カラマツ及び広葉樹

- ・学識経験者の意見聴取(放医研・森林総研・北大等)
- ・IAEAに報告(福島県とIAEAとのプロジェクト H24.12.14締結、H29.12.25更新)



選定した標準木の周辺5点で計測



空間線量率の測定状況

森林内の調査箇所における標準的な値を測定

- ・標準木から1m離れた地点と東西南北に7m離れた4地点で測定 (計5点の平均)
- ・各地点において、指示値が安定した後に1分間隔で3回測定値を記録
- ・測定高さは1m
- ・測定機器は1年以内に校正したシンチレーション式サーベイメーターとする
- ・検出器部分をビニル袋で覆うなど、機器の現場での汚染防止措置を講じる
- ・窪地の底や有機物が削れた急斜面等の箇所は避ける

立木試料の採取



辺材・心材の採取
(おが粉状試料を採取)



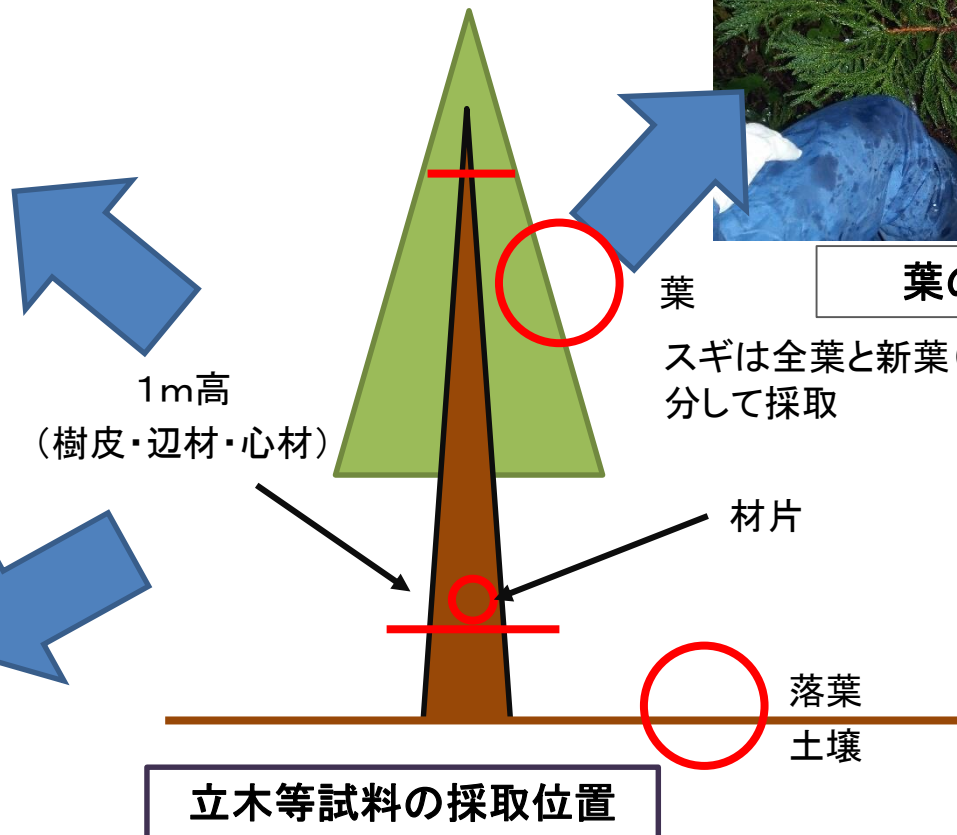
葉の採取

葉

スギは全葉と新葉(R2^R3生長分)を区分して採取



樹皮の採取



部位別(樹皮、辺材、心材及び葉)に試料を採取

土壌試料の採取

落葉層と土壌層に
区分して試料採取



25cm × 25cmから試料を採取

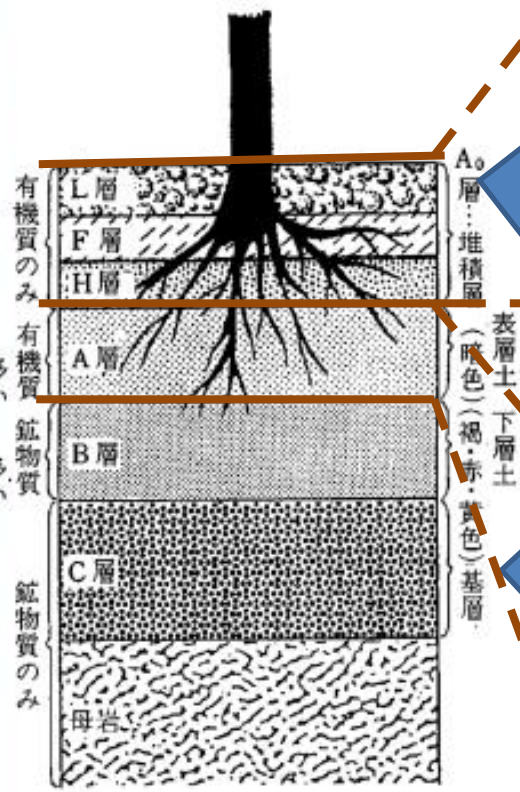
落葉試料の採取



土壌試料の採取

Cs
濃度
分析
へ

ゲルマニウム
半導体検出器

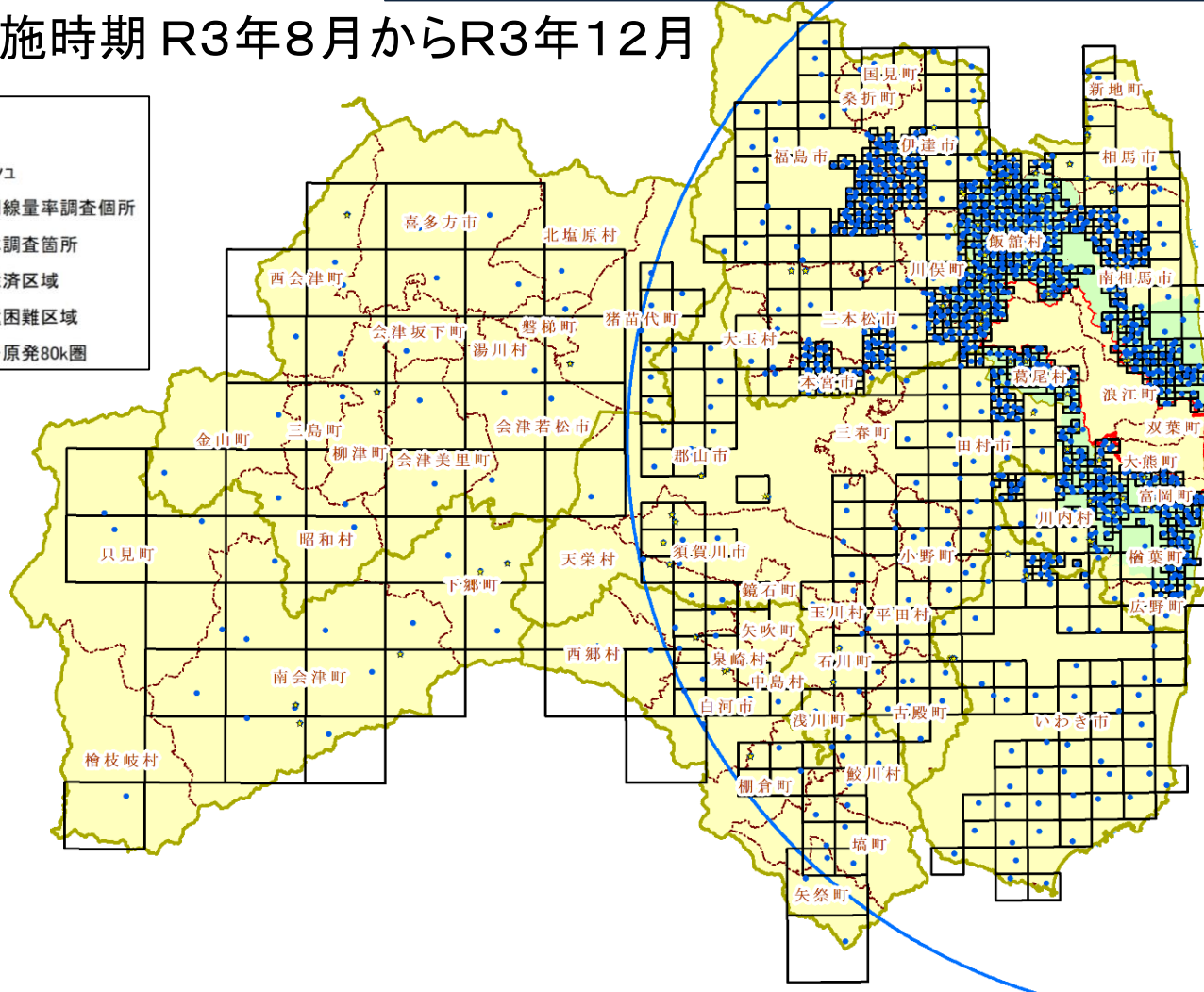
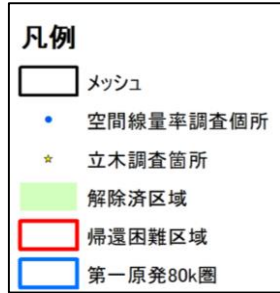


落葉、土壌試料
採取位置の模式図

モニタリング調査の概要

調査実施時期 R3年8月からR3年12月

調査箇所(R3年度)



方部	箇所数
県北	361
県中	122
県南	38
会津	33
南会津	22
相双	653
いわき	71
計	1,300

- 原発からの80km圏外は10kmメッシュ、80km圏内は4kmメッシュ
- H23年度 $3.4\mu\text{Sv/h}$ 、H24年度以降 $1.0\mu\text{Sv/h}$ を計測した箇所は1kmメッシュに細分化
- H25年度から**避難指示解除準備区域内の調査箇所を追加**
(帰還困難区域は立入が制限されていることから未実施)

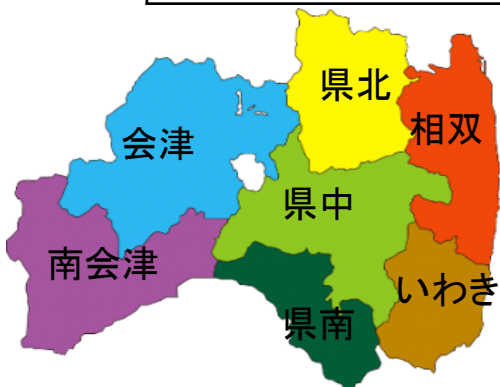
空間線量率の管内別測定結果

令和3年度(2021)調査1,300箇所での測定結果

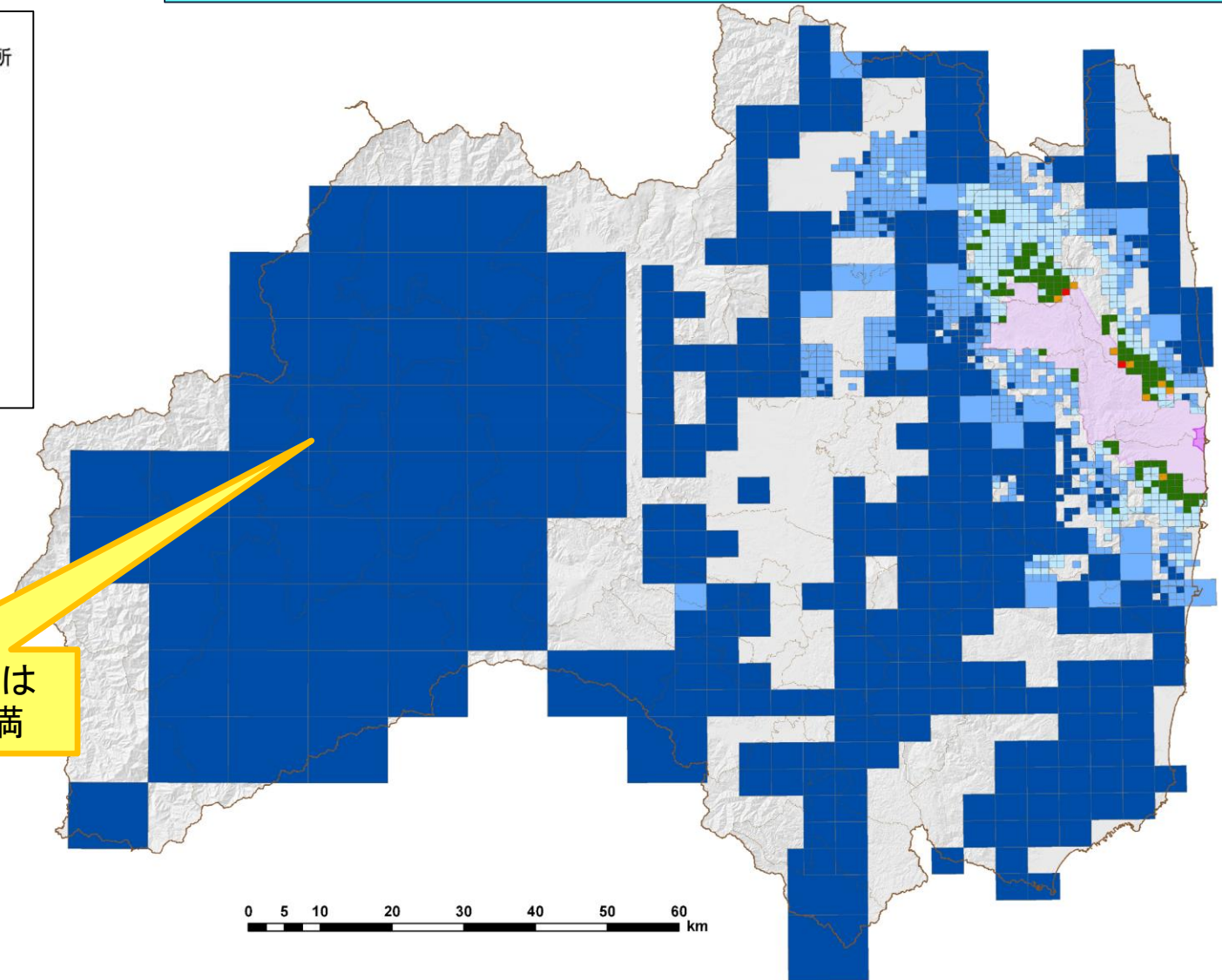
単位(μSv/h)

管内別	箇所数	最大値	最小値
県北	361	1.15	0.04
県中	122	0.37	0.04
県南	38	0.19	0.04
会津	33	0.08	0.03
南会津	22	0.07	0.02
相双	653	2.82	0.09
いわき	71	0.91	0.05

2022年3月1日現在の換算値



・相双管内については、帰還困難区域に隣接していることから、空間線量率が高い値となっている。

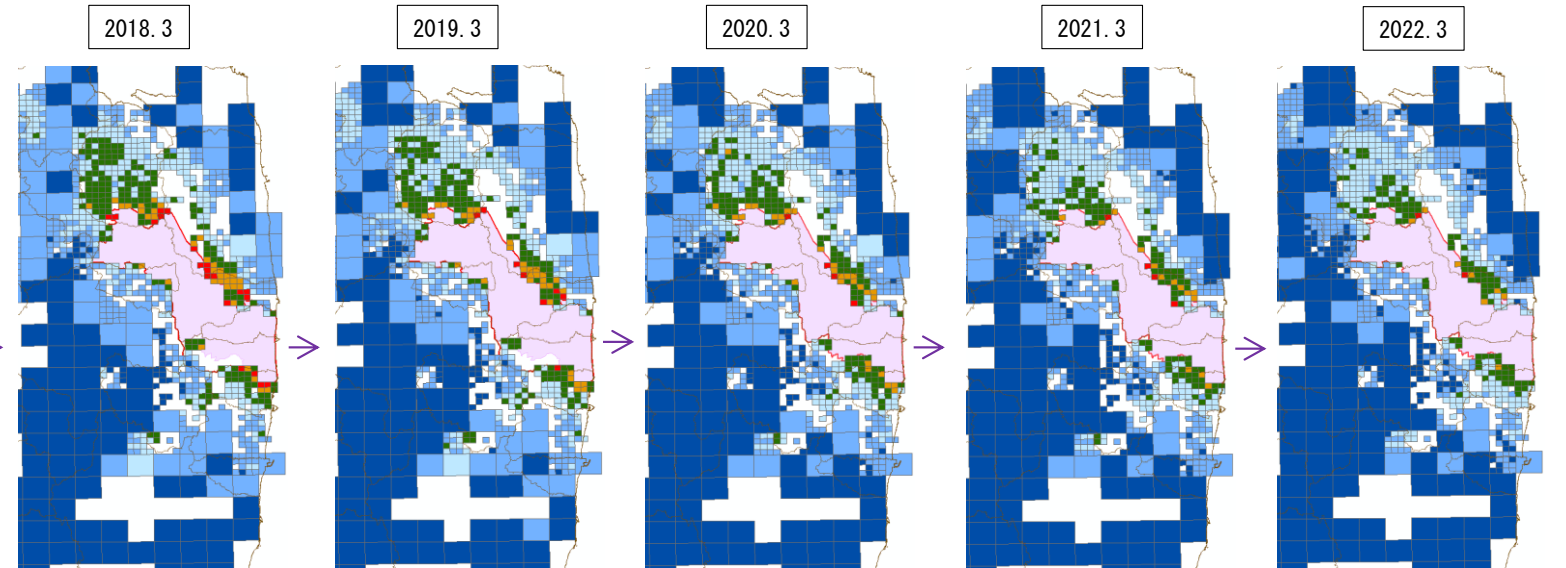
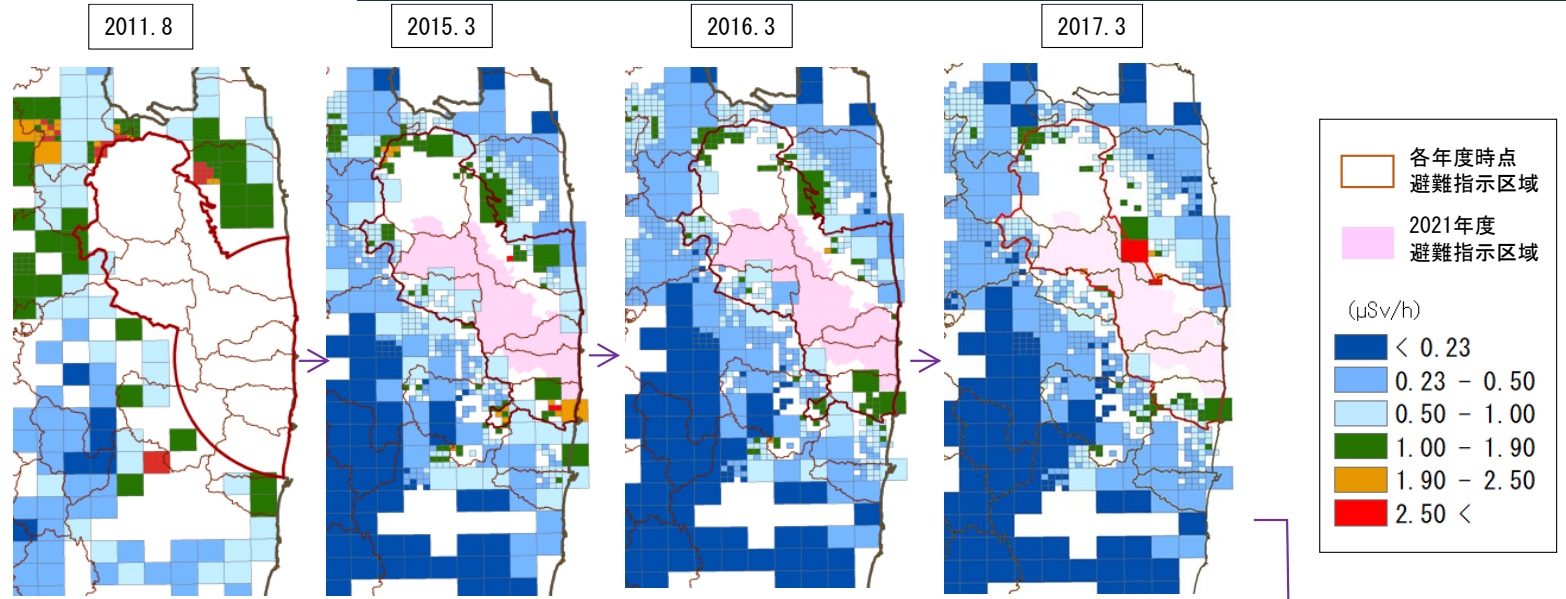


県南、会津、南会津は
すべて $0.23\mu\text{Sv/h}$ 未満

森林内の空間線量率は年々減少 <継続362箇所>

○ $0.23\mu\text{Sv/h}$ 未満の区域の増加	42箇所12%(H23)	→	261箇所	72%(R3)
○ $1.00\mu\text{Sv/h}$ 以上の区域の減少	127箇所35%(H23)	→	0箇所	0%(R3)

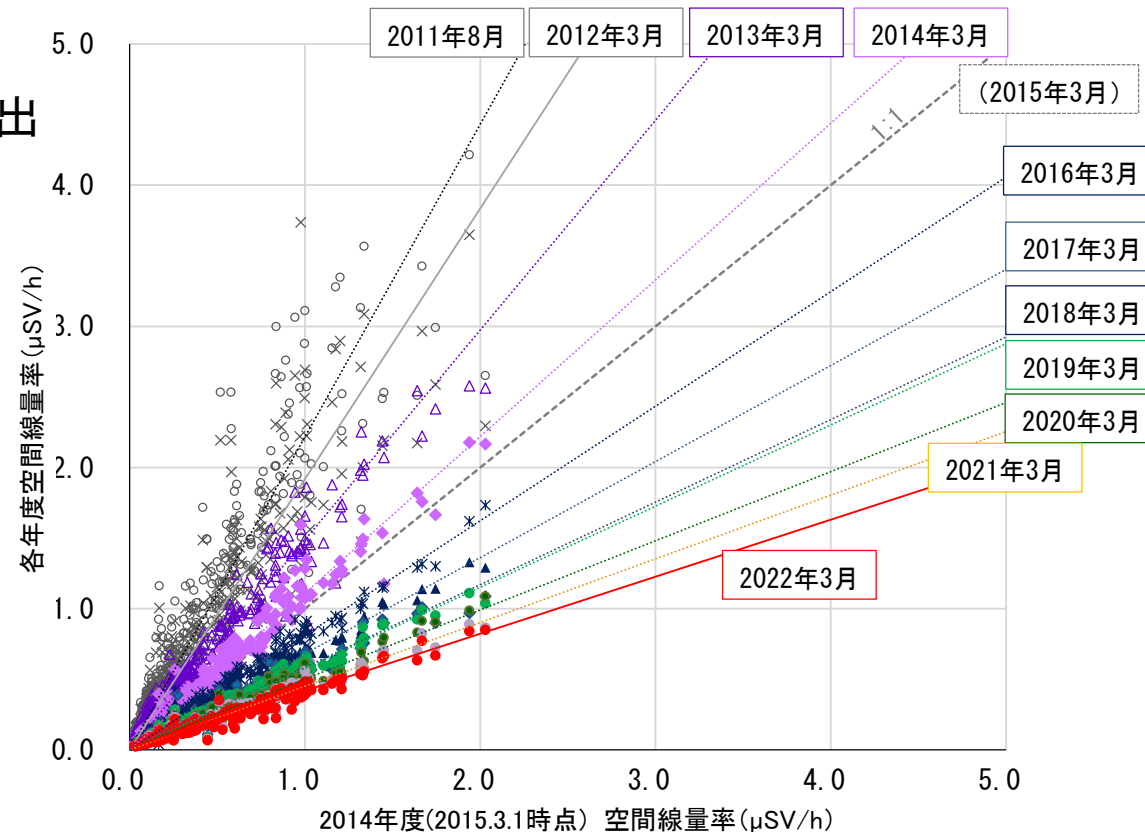
図表令和4年3月1日現在の換算値



解除区域及び周辺の調査箇所の空間線量率も徐々に低下

過去調査データとの比較

※ 平成23年度(2011年)
調査箇所継続362点を抽出

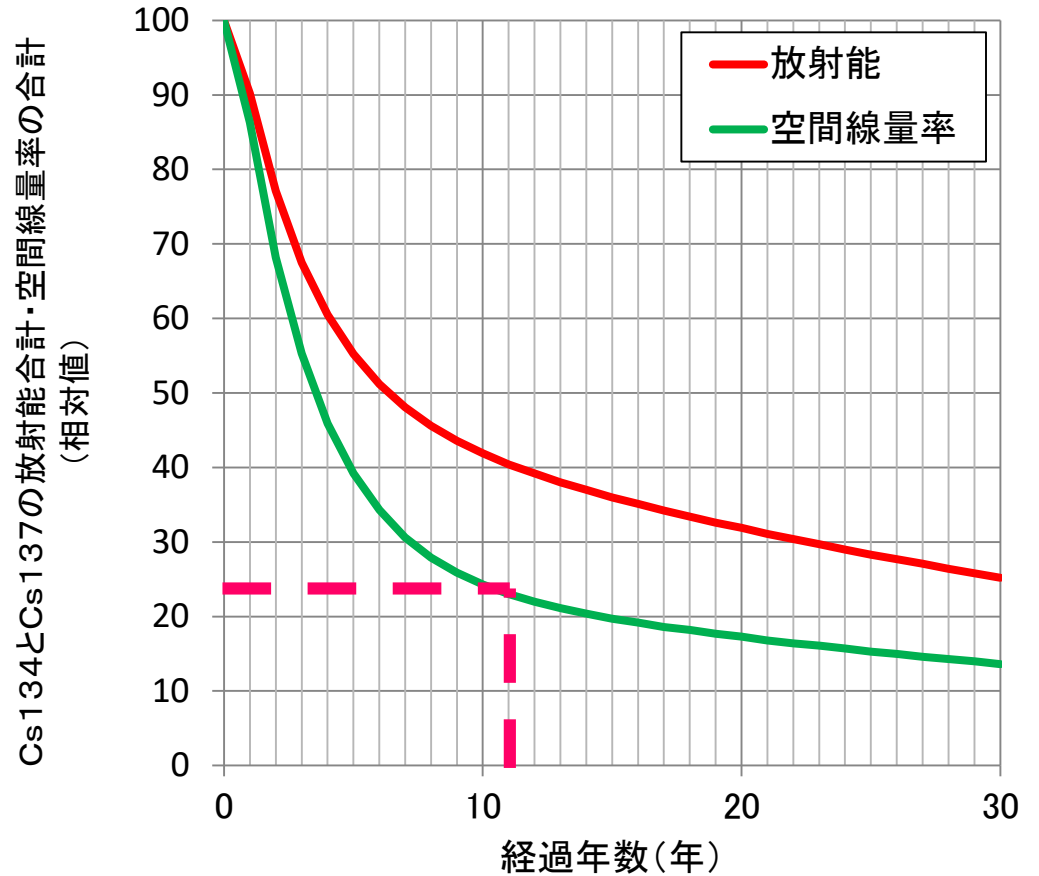


(μSv/h)	H23(2011) 2011年8月	H23(2011) 2012年3月	H24(2012) 2013年3月	H25(2013) 2014年3月	H26(2014) 2015年3月	H27(2015) 2016年3月	H28(2016) 2017年3月	H29(2017) 2018年3月	H30(2018) 2019年3月	R1(2019) 2020年3月	R2(2020) 2021年3月	R3(2021) 2022年3月
平均	0.91	0.79	0.62	0.44	0.39	0.32	0.27	0.23	0.23	0.20	0.18	0.17
中央値	0.60	0.52	0.44	0.31	0.25	0.21	0.18	0.16	0.15	0.13	0.12	0.11
最大値	4.32	3.74	2.58	2.18	2.03	1.73	1.33	1.09	1.11	1.09	0.89	0.85
最小値	0.09	0.07	0.09	0.05	0.03	0.03	0.03	0.03	0.03	0.03	0.03	0.02
標準偏差	0.80	0.69	0.50	0.39	0.36	0.29	0.24	0.20	0.20	0.18	0.16	0.15
変動係数	0.88	0.88	0.81	0.88	0.92	0.91	0.88	0.87	0.87	0.88	0.86	0.86
箇所数	362	362	362	362	362	362	362	362	362	362	362	362
物理学的減衰	0.91	0.79	0.63	0.51	0.42	0.36	0.32	0.28	0.26	0.24	0.22	0.21

空間線量率の低減率 H23.8~R4.3 約81% ⇒ 概ね物理学的減衰に従って低減

Csの減衰曲線

経過年数(年次)	放射能の減衰	空間線量率の減衰
0	H23	100
1	H24	90
2	H25	77
3	H26	68
4	H27	60
5	H28	55
6	H29	51
7	H30	48
8	R1	46
9	R2	44
10	R3	42
11	R4	23
12	R5	39
13	R6	38
14	R7	37
15	R8	36
16	R9	35
17	R10	34
18	R11	33
19	R12	33
20	R13	32
21	R14	31
22	R15	30
23	R16	30
24	R17	29
25	R18	28
26	R19	28
27	R20	27
28	R21	26
29	R22	26
30	R23	25

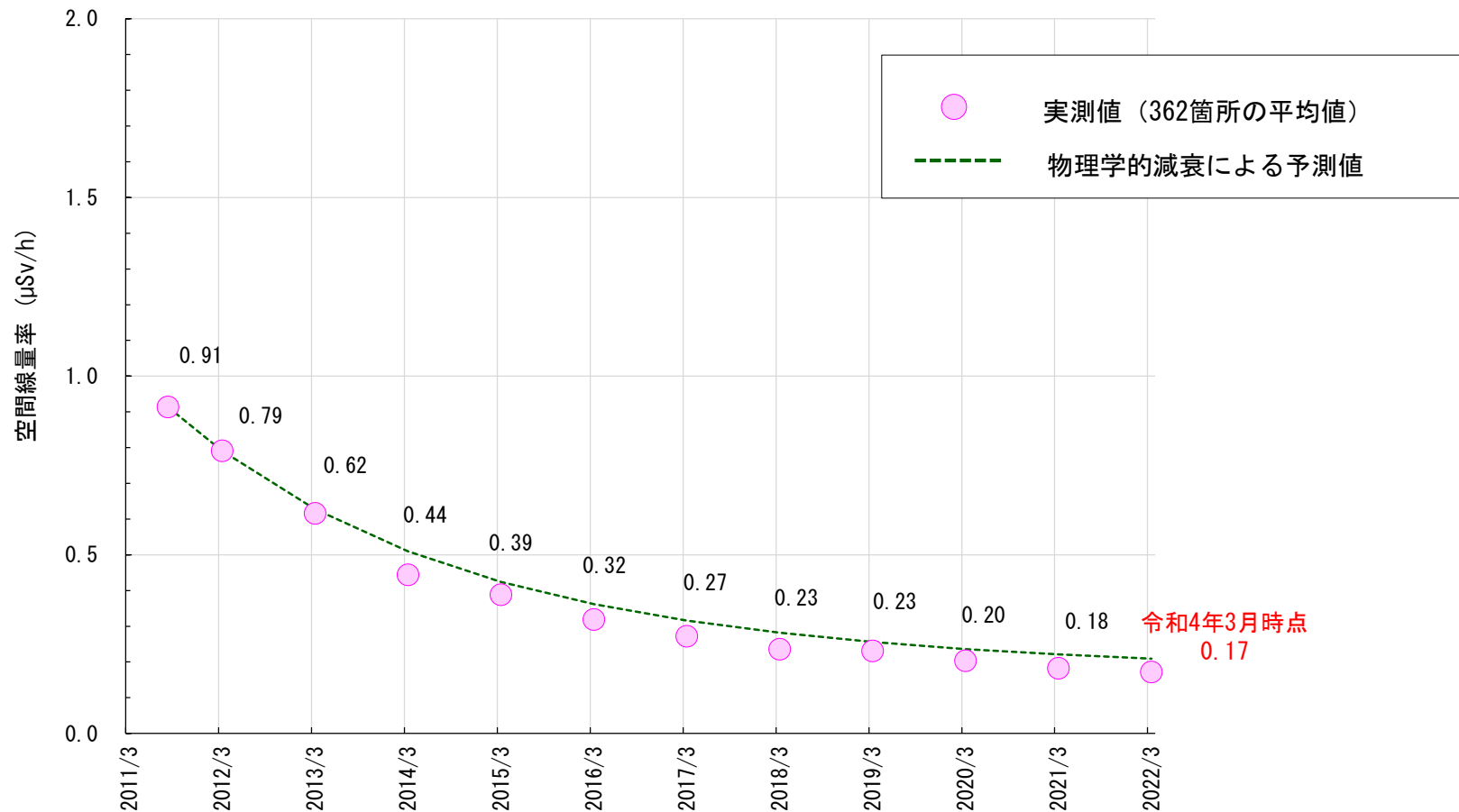


11年経過した現在の空間線量率は約23%まで低減

放射能と空間放射線量率の減衰割合の推計

HP「福島第一原発事故直後の福島県中を通りにおける放射性物質の飛散状況はどのようなものだったか—事故直後に行われた高エネルギー加速器研究機構と理化学研究所の合同チームによる調査結果—」を基に作成

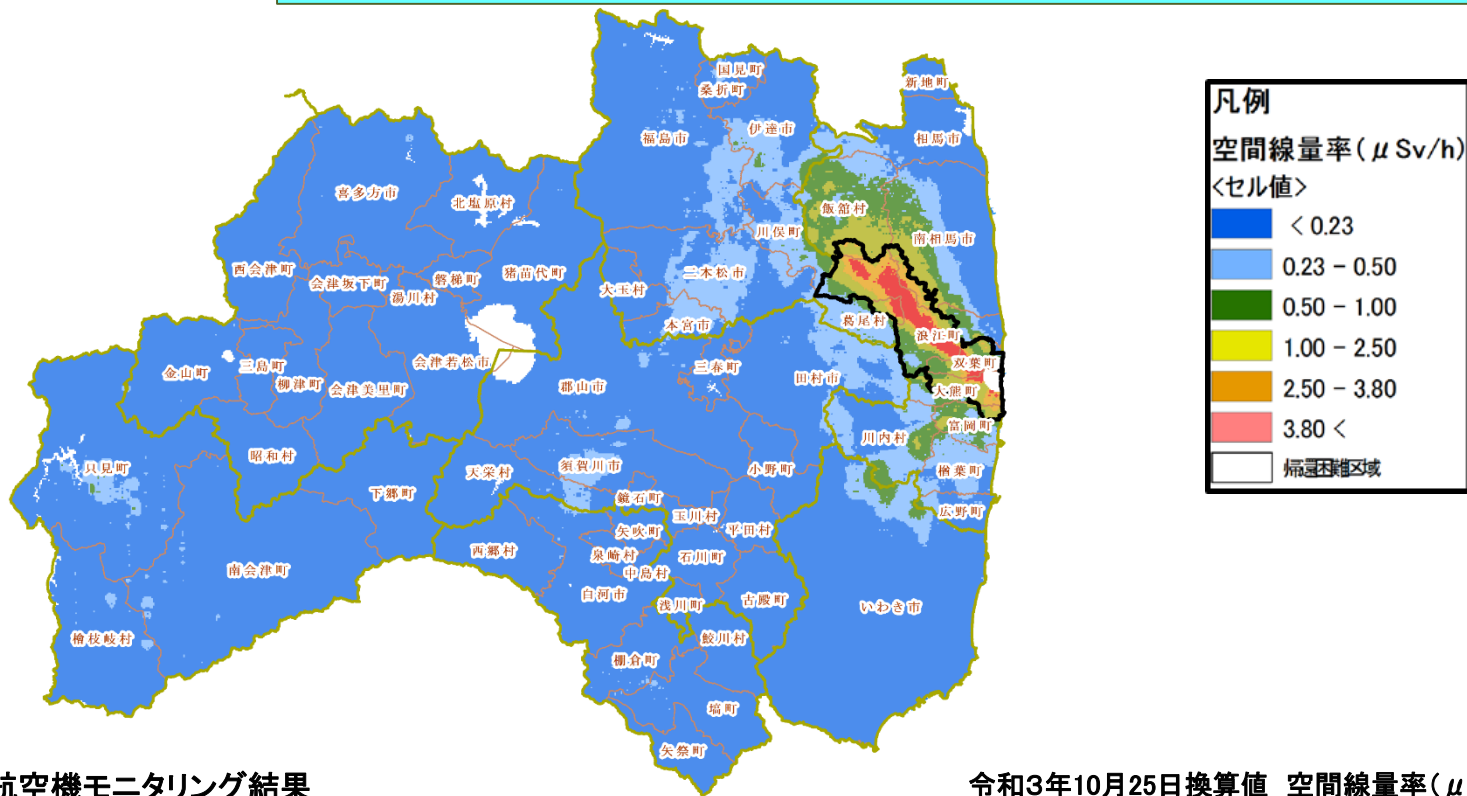
Csの減衰曲線との比較



放射性Csの物理的減衰曲線とモニタリング実測値(362箇所 の平均値)の関係

- 現在まで、森林内の空間線量率は物理学的減衰率とほぼ同じく低下
- **今後も放射性Csの物理学的減衰率で低下が見込まれる**
※降雨等による流入・流出の影響(ウェザリング効果)は考慮していない

航空機モニタリングの結果



凡例

空間線量率(μSv/h)
<セル値>

- < 0.23
- 0.23 - 0.50
- 0.50 - 1.00
- 1.00 - 2.50
- 2.50 - 3.80
- 3.80 <
- 帰還困難区域

2021(R3)年度 航空機モニタリング結果

令和3年10月25日換算値 空間線量率(μSV/h)

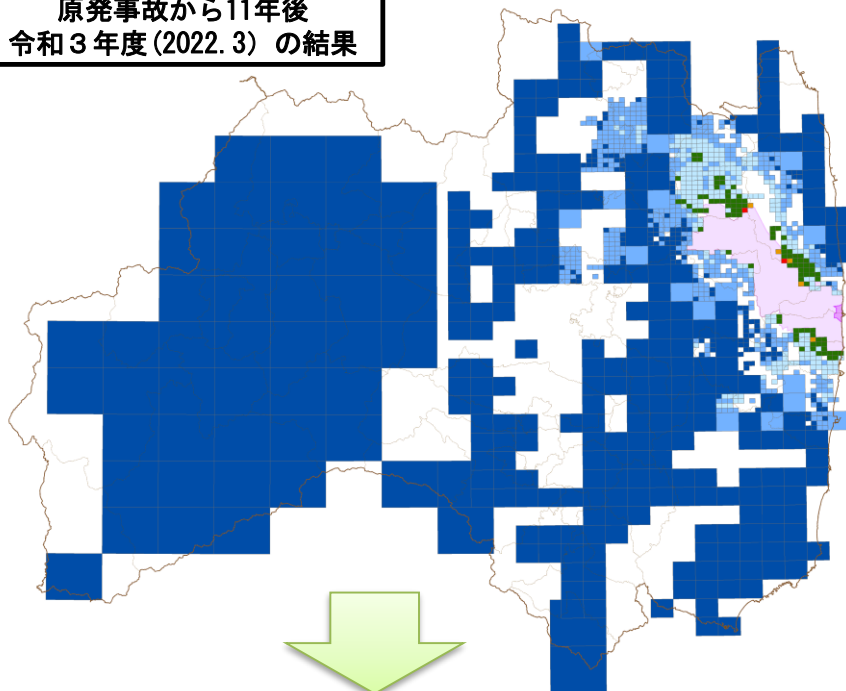
県内全域	全県	県北	県中	県南	会津	南会津	相双	いわき
平均値	0.224	0.192	0.136	0.121	0.103	0.123	0.864	0.136
最大値	13.000	1.900	0.700	0.340	0.310	0.750	13.000	0.940
最小値	0.100	0.100	0.100	0.100	0.100	0.100	0.100	0.100

※全測定点 212, 259地点 (2021(R3).3.4公表)原子力規制委員会公表資料より

県内森林域	総計	県北	県中	県南	会津	南会津	相双	いわき
平均値	0.235	0.187	0.136	0.124	0.104	0.124	1.010	0.145
最大値	13.000	1.900	0.700	0.340	0.310	0.750	13.000	0.940
最小値	0.100	0.100	0.100	0.100	0.100	0.100	0.100	0.100

※測定点 152, 029地点 (2021(R3).3.4公表)原子力規制委員会公表資料より

原発事故から11年後
令和3年度(2022.3)の結果

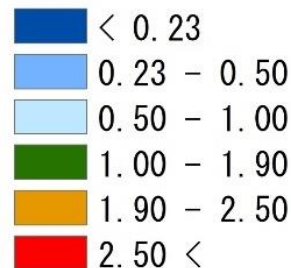


※2011年8月から継続調査を実施している362箇所に基づく予測値

(単位はμSv/h)

2022年3月現在	原発事故15年後 2026年3月現在	原発事故20年後 2031年3月現在	原発事故25年後 2036年3月現在
0.17	0.15	0.14	0.12

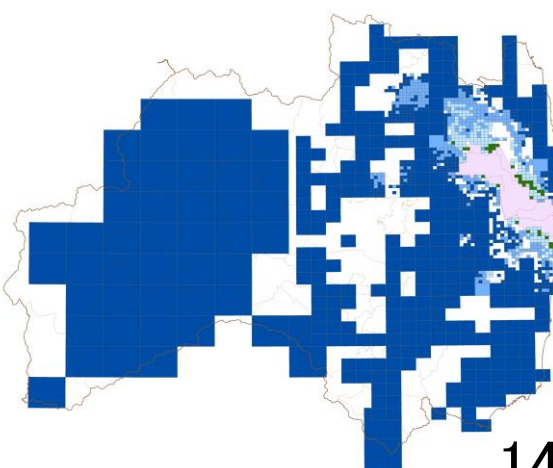
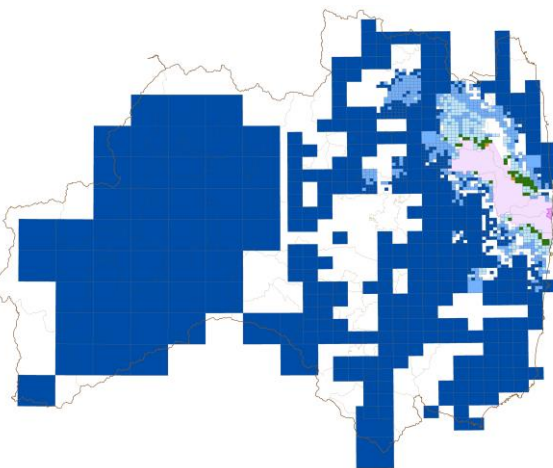
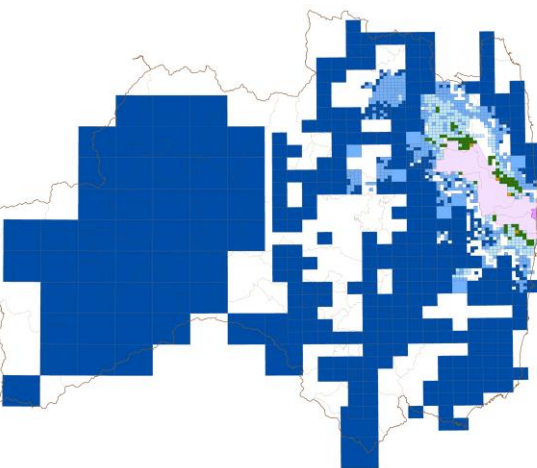
(μSv/h)



原発事故から15年後
2026年の予測

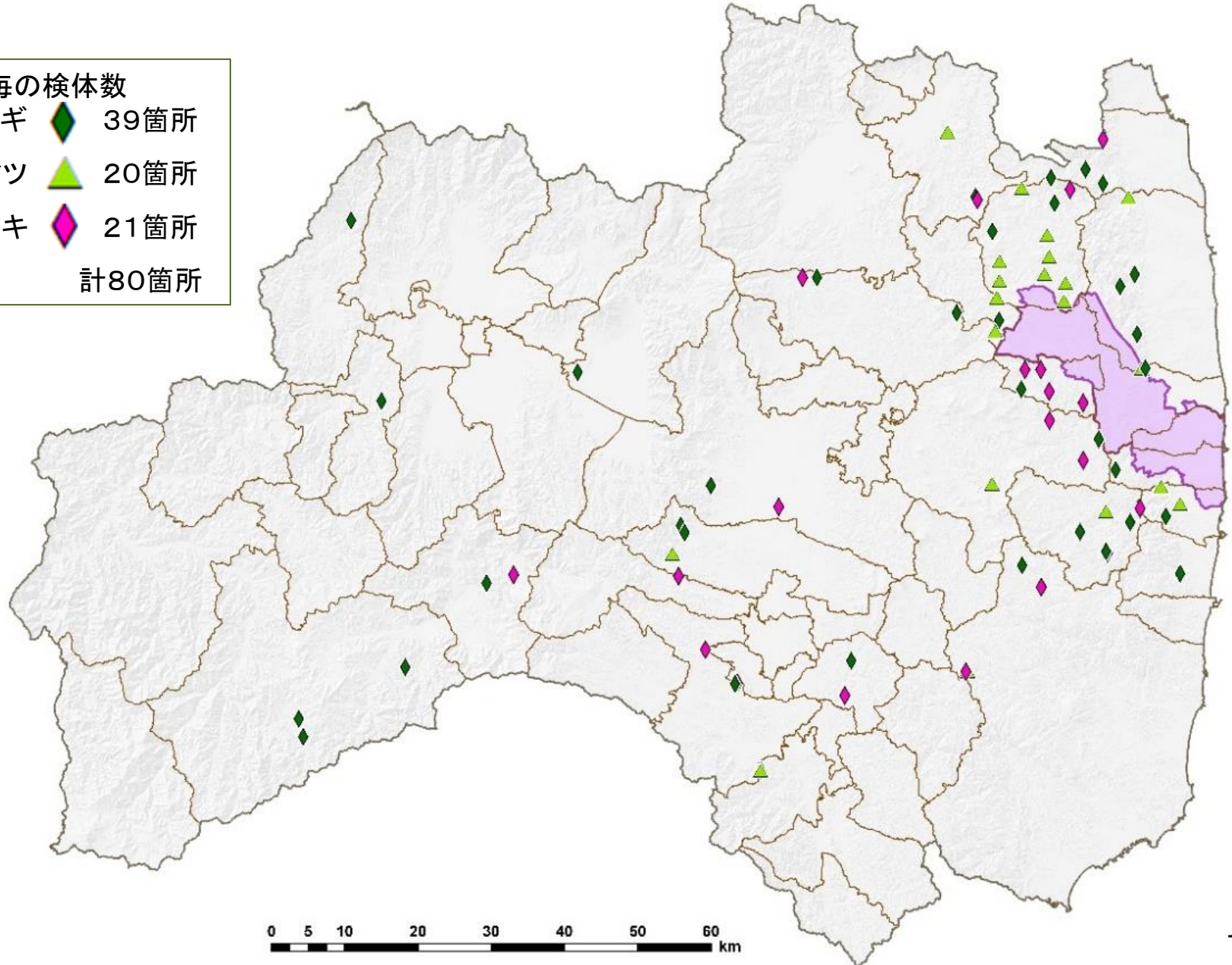
原発事故から20年後
2031年の予測

原発事故から25年後
2036年の予測



樹木調査箇所位置図

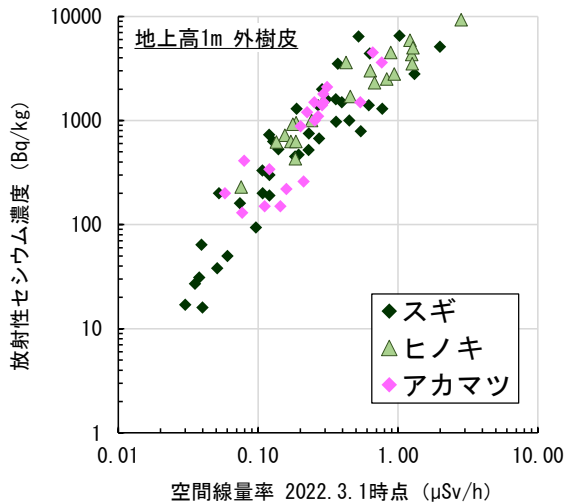
樹種毎の検体数	
スギ	◆ 39箇所
アカマツ	▲ 20箇所
ヒノキ	◇ 21箇所
計80箇所	



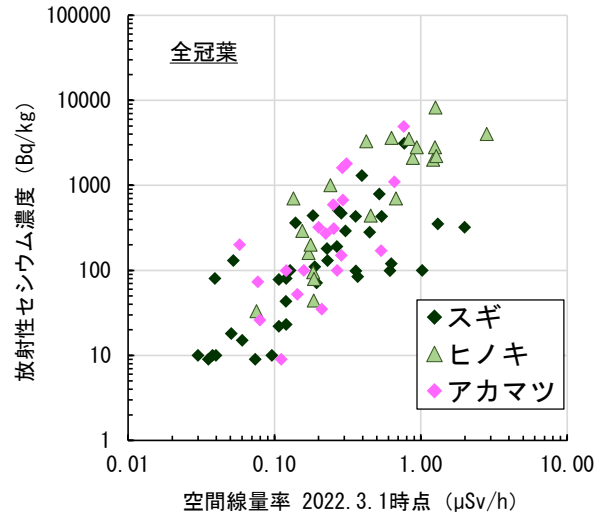
空間線量率とCs濃度の関係

空間線量率と各種放射性Cs濃度との関係

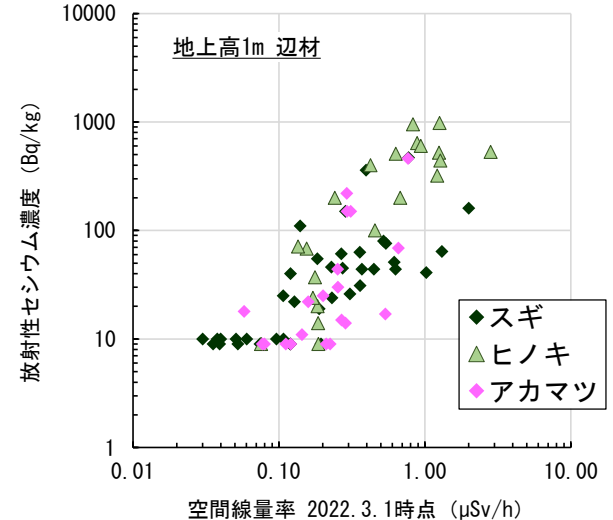
【1m高 外樹皮】



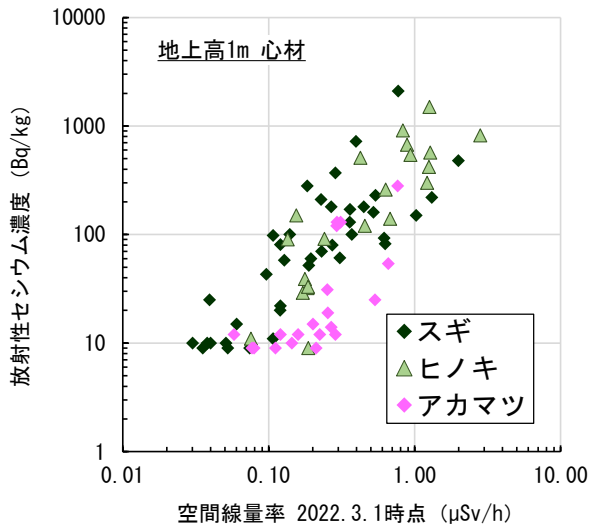
【葉】



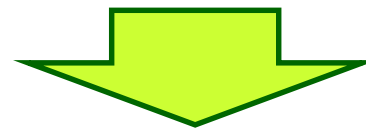
【1m高 辺材】



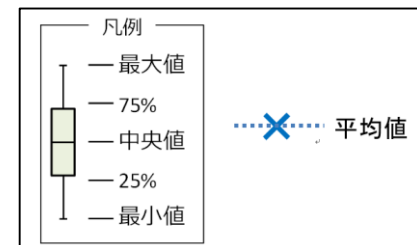
【1m高 心材】



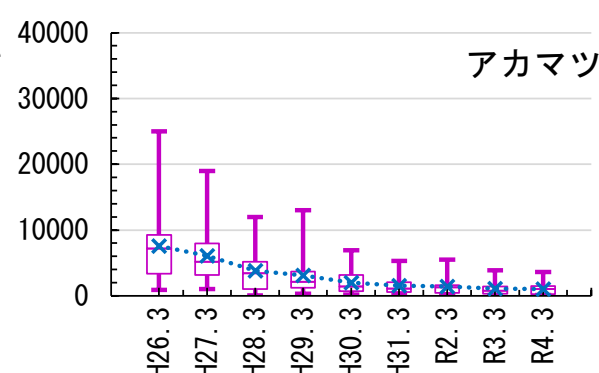
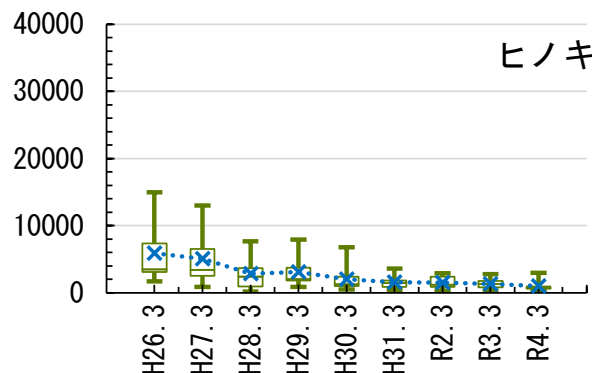
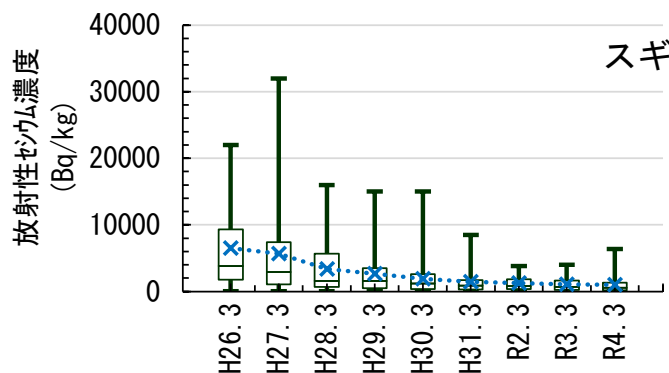
空間線量率が高いほど、材等に含まれる放射性Cs濃度も高い傾向



空間線量率の把握が今後の林業生産活動の目安に

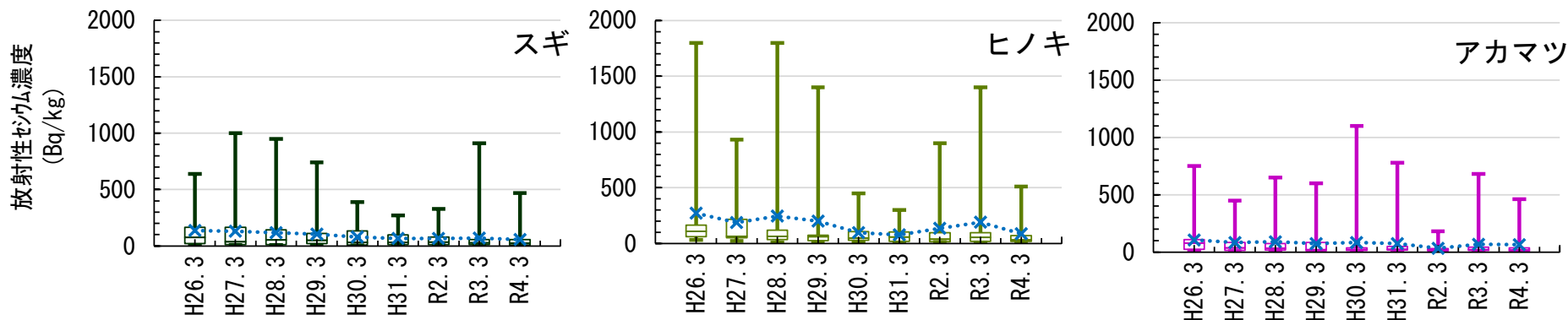


地上高1m外樹皮 (Bq/kg)

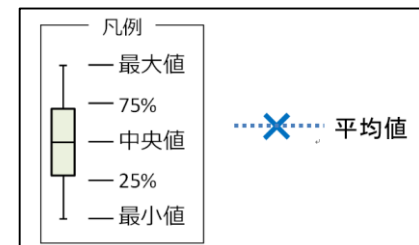


地上高1m 外樹皮		単位	2013年度 H26.3時点	2014年度 H27.3時点	2015年度 H28.3時点	2016年度 H29.3時点	2017年度 H30.3時点	2018年度 H31.3時点	2019年度 R2.3時点	2020年度 R3.3時点	2021年度 R4.3時点
スギ	平均値	Bq/kg	6507	5707	3384	2647	1916	1423	1262	1065	1029
	2013年度比	%	100.0	87.7	52.0	40.7	29.4	21.9	19.4	16.4	15.8
ヒノキ	平均値	Bq/kg	6190	5096	2861	3087	2019	1589	1509	1323	983
	2013年度比	%	100.0	82.3	46.2	49.9	32.6	25.7	24.4	21.4	15.9
アカマツ	平均値	Bq/kg	7573	6074	3792	2781	1997	1495	1443	1064	1023
	2013年度比	%	100.0	80.2	50.1	36.7	26.4	19.7	19.0	14.1	13.5

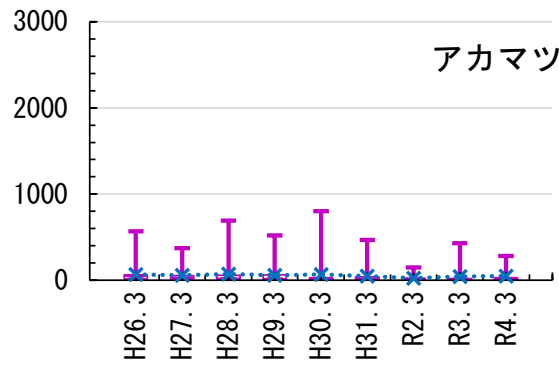
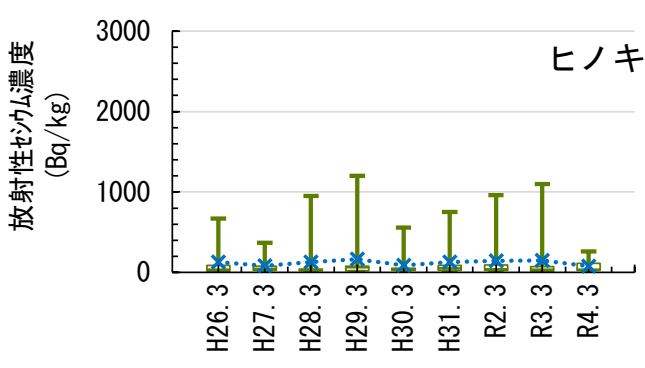
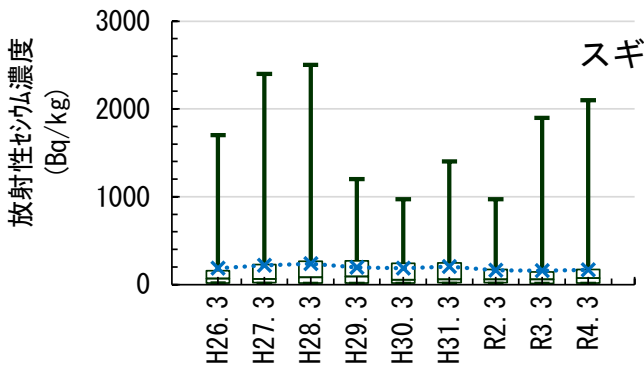
地上高1m辺材 (Bq/kg)



地上高1m 辺材		単位	2013年度 H26.3時点	2014年度 H27.3時点	2015年度 H28.3時点	2016年度 H29.3時点	2017年度 H30.3時点	2018年度 H31.3時点	2019年度 R2.3時点	2020年度 R3.3時点	2021年度 R4.3時点
スギ	平均値	Bq/kg	136	129	118	106	79	65	65	70	56
	2013年度比	%	100.0	94.9	86.5	77.5	58.1	47.9	47.8	51.3	41.4
ヒノキ	平均値	Bq/kg	295	186	244	200	97	78	134	190	86
	2013年度比	%	100.0	62.9	82.6	67.8	33.0	26.4	45.5	64.2	29.2
アカマツ	平均値	Bq/kg	107	84	89	70	84	70	32	68	65
	2013年度比	%	100.0	78.8	83.5	65.6	79.1	65.5	30.0	63.7	60.6



地上高1m心材 (Bq/kg)

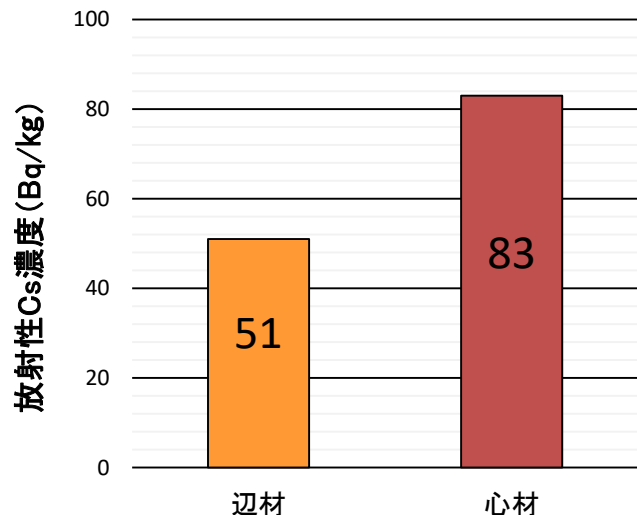


地上高1m心材		単位	2013年度 H26.3時点	2014年度 H27.3時点	2015年度 H28.3時点	2016年度 H29.3時点	2017年度 H30.3時点	2018年度 H31.3時点	2019年度 R2.3時点	2020年度 R3.3時点	2021年度 R4.3時点
スギ	平均値	Bq/kg	186	218	238	193	188	204	162	158	167
	2013年度比	%	100.0	117.2	128.1	103.6	100.9	109.9	86.9	84.9	89.5
ヒノキ	平均値	Bq/kg	142	83	130	163	87	127	147	151	77
	2013年度比	%	100.0	58.3	91.7	115.4	61.4	90.0	103.6	106.6	54.6
アカマツ	平均値	Bq/kg	68	59	70	56	65	47	24	43	46
	2013年度比	%	100.0	87.7	102.9	82.6	96.7	69.9	35.5	63.6	67.8

木材に含まれるCs濃度

<空間線量0.5μSv以下の区域>

・立木調査80箇所のうち
空間線量0.50μSv/h以下の59箇所の平均データ



スギ、ヒノキ、アカマツで調査を行い、スギは心材の方が辺材よりも濃度が高い傾向

※ 平均値の比較: 定量下限値未満を示す試料についてはその濃度として定量下限値を採用

<参考>

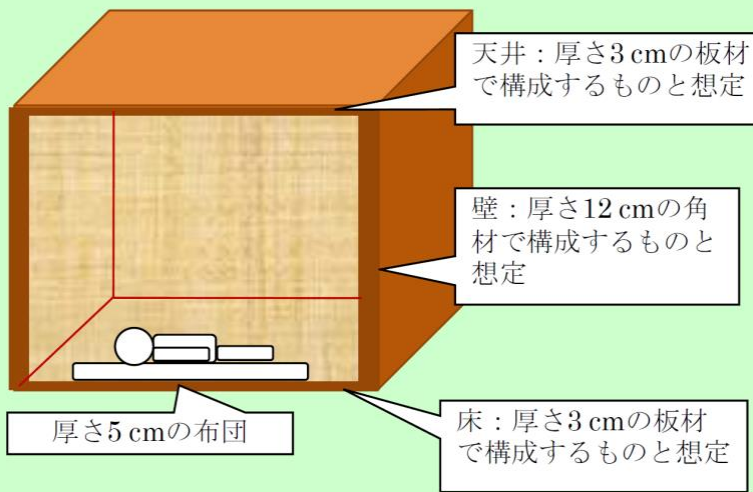
・継続調査箇所における全樹種平均データ(辺材・心材)

辺材

63Bq/kg (2021 N=65)
最大: 127Bq/kg (2015 N=66)
最小: 65Bq/kg (2019 N=66)

心材

118Bq/kg (2021 N=65)
最大: 170Bq/kg (2015 N=66)
最小: 117Bq/kg (2019 N=66)

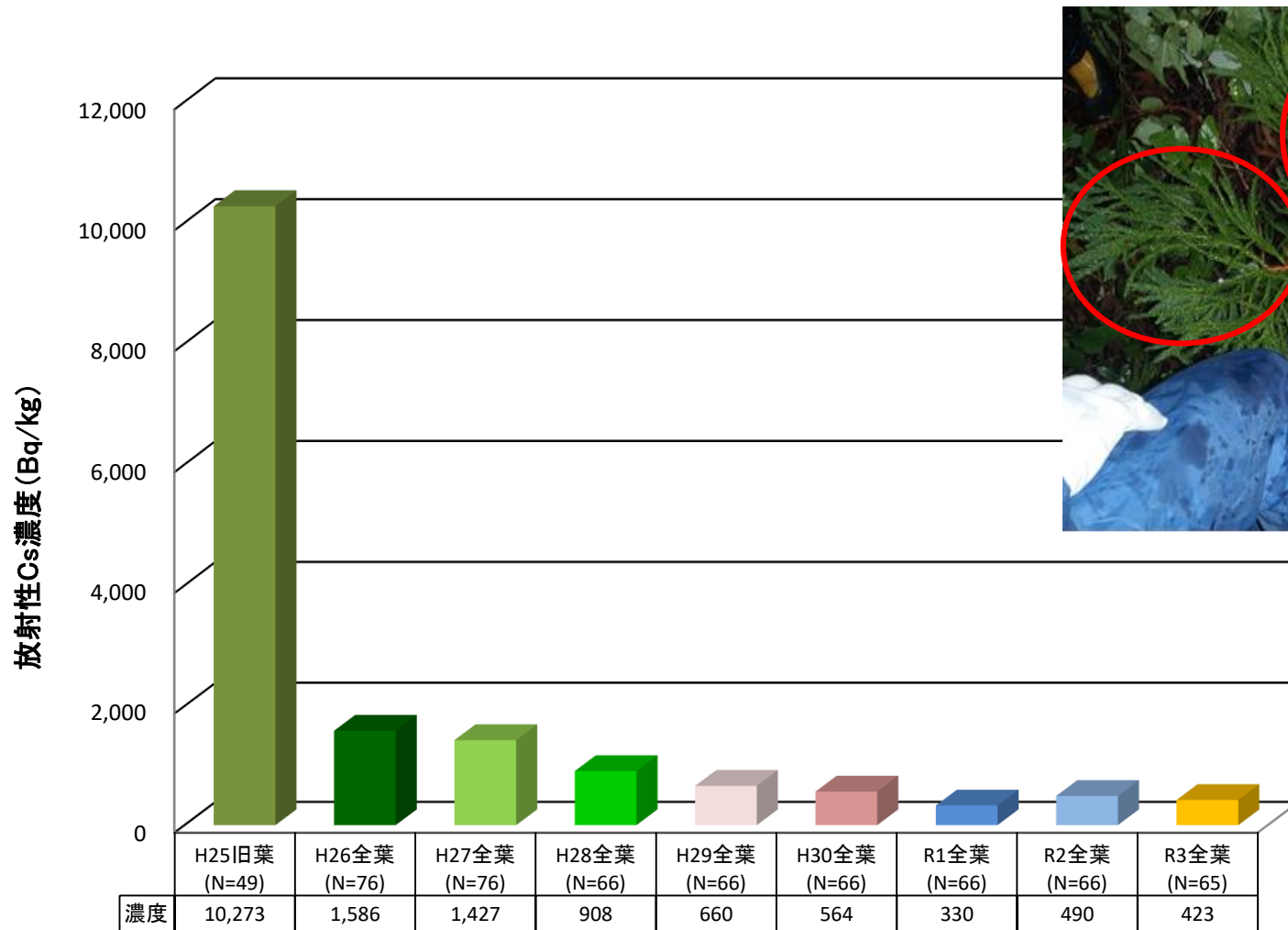


学識経験者に確認したところ、本調査でCs濃度の最大値^{※1}を示した木材を住宅に使用した場合の追加被ばく量は年間0.050 mSv^{※2} **時間当り0.007μSv/h**は、自然放射線による年間被ばく量2.1 mSvに比べ著しく小さく、環境や健康への影響はほとんどないとの評価が得られた。

※1 2,100 Bq/kg (帰還困難区域に隣接する調査地から採取)

※2 林野庁資料『木材で囲まれた居室を想定した場合の試算結果・IAEA-TECDOC-1376』に基づき試算

葉に含まれるCs濃度

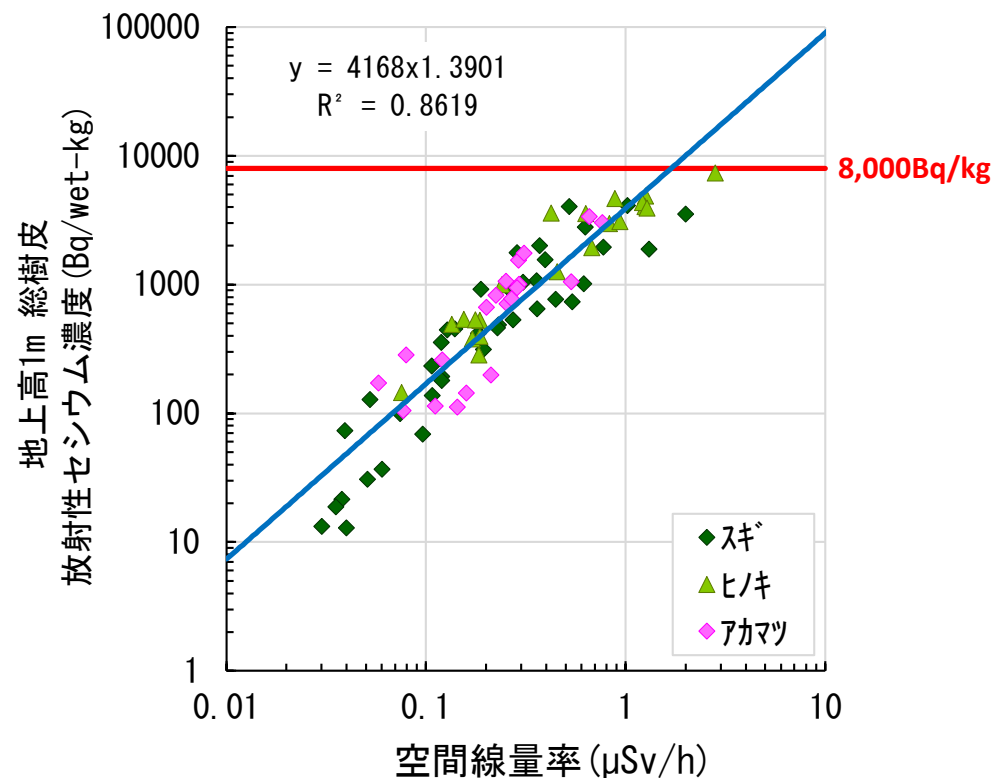
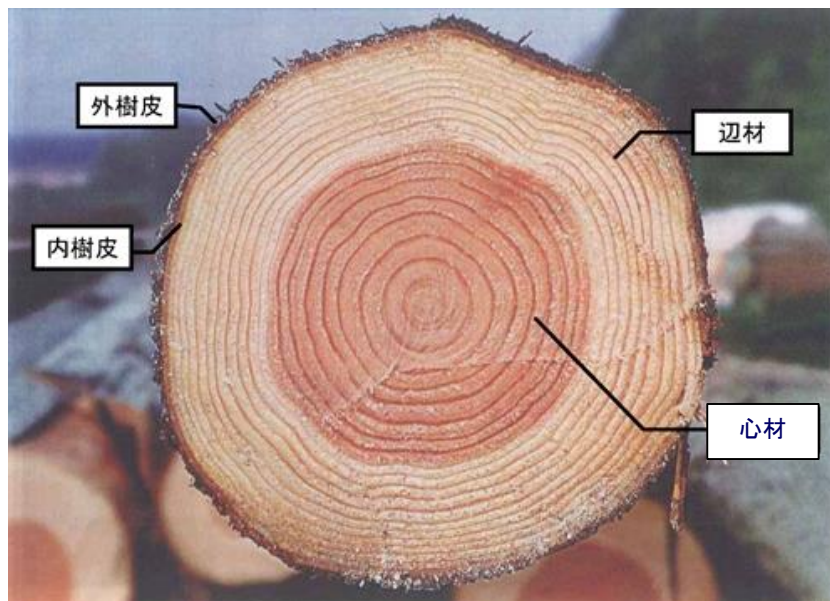


全葉の放射性Cs濃度（平均値の比較）

R3全葉は、H25旧葉に比べ、Cs濃度は、約4%に低減

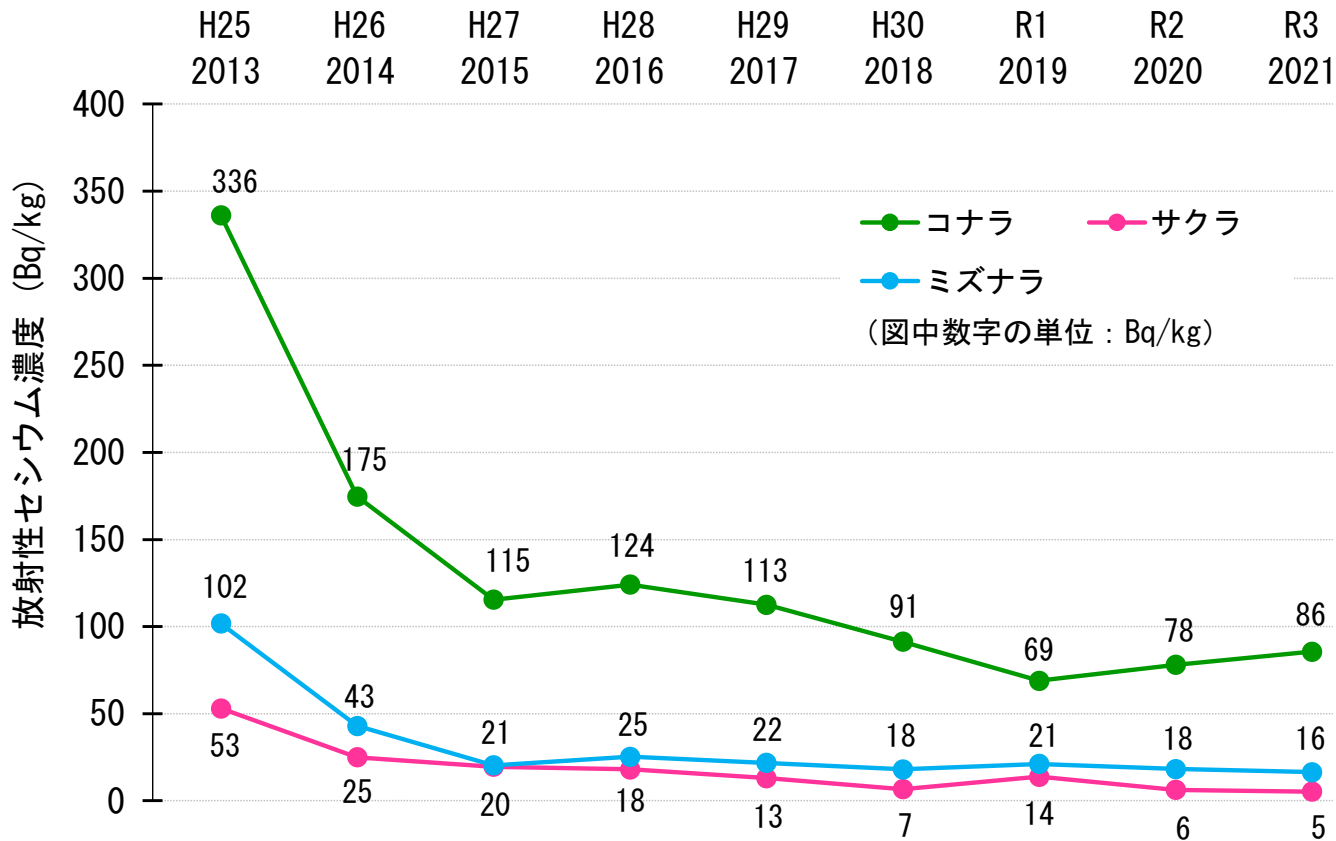
樹皮に含まれるCs濃度

- ・8,000Bq/kg超の樹皮が見込まれる箇所空間線量率を、本調査結果の回帰式などから推定(全樹種平均 $1.69 \mu\text{Sv/h}$)
- ・R3年度調査では8,000Bq/kgを超えた箇所はない



空間線量率と1m高さの樹皮の放射性Cs濃度の関係から推定

広葉樹萌芽に含まれるCs濃度



H25採取時



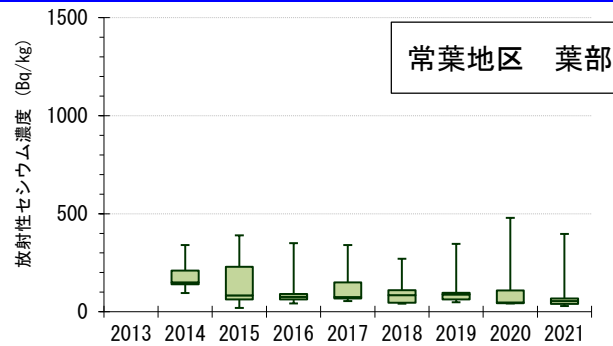
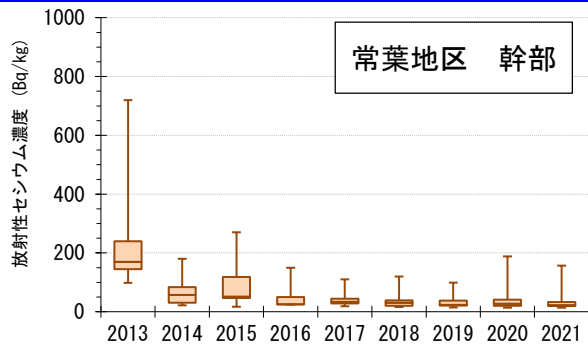
R3採取時



- ・H25～H27にかけて大きく低下
その後は漸減傾向で推移
- ・ミズナラ、サクラは、コナラに比べCs濃度が低い

ミズナラ n=4
コナラ n=24
サクラ n=2

コナラ萌芽に含まれるCs濃度(枝)

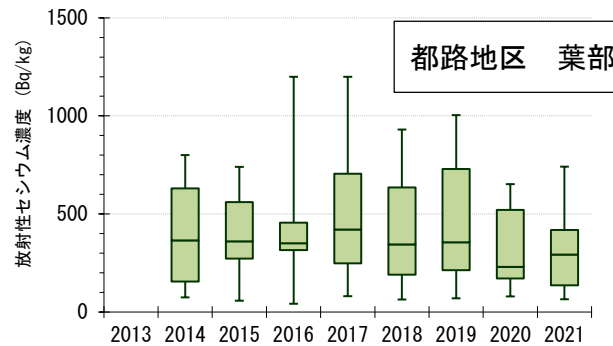
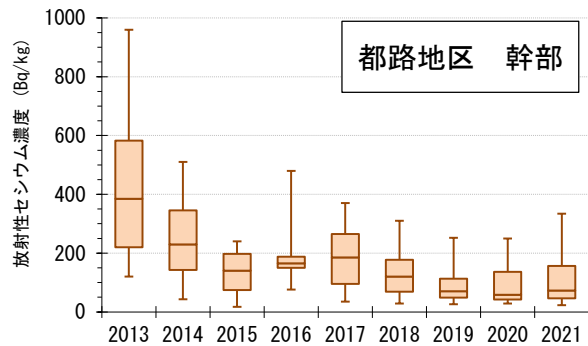


2021年度 空間線量率

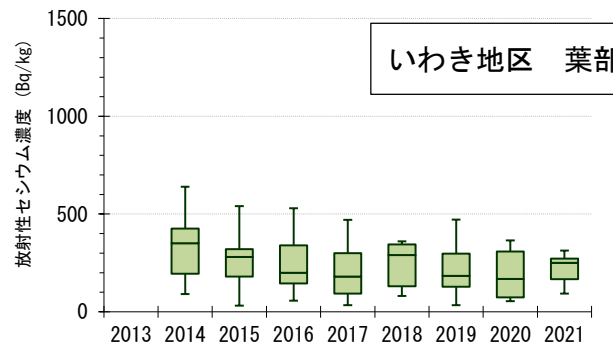
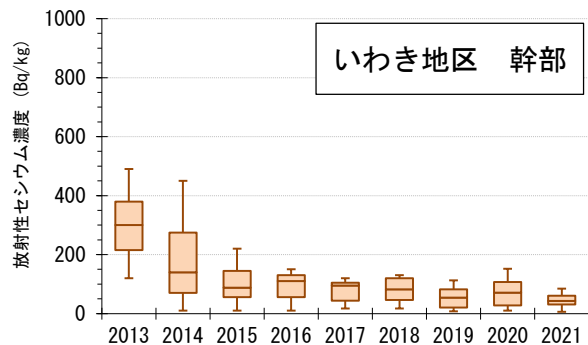
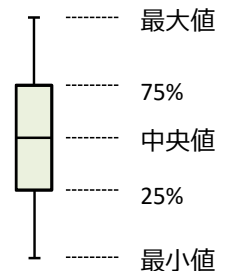
常葉地区 : 0.15 $\mu\text{Sv/h}$

都路地区 : 0.21 $\mu\text{Sv/h}$

いわき地区 : 0.08 $\mu\text{Sv/h}$



凡例



幹部Cs濃度の低減率は鈍化傾向
葉部Cs濃度は2014年から大きな変化なし

森林の放射性物質の動態変化

(林野庁公表: 令和3年度 森林内の放射性物質の分布状況調査について 福島県林業研究センター協力)

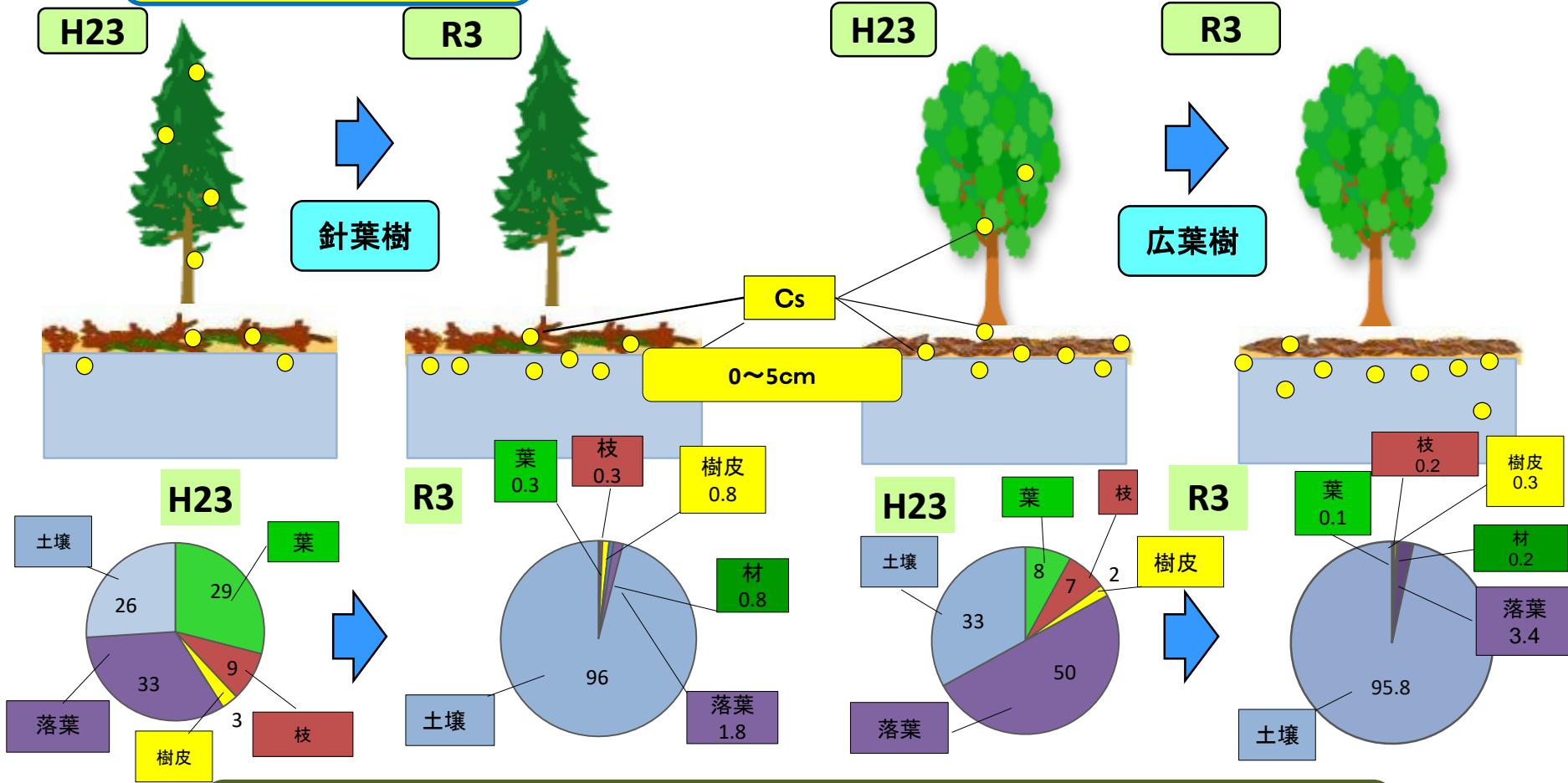
川内村 スギ林

大玉村 広葉樹林

図中の「Cs」は放射性セシウムの略称

樹木Csは全体の2%程度
⇒ Csが土壌に移行

樹木Csは全体の1%程度
⇒ Csが土壌に移行



森林内のCsの95%以上が土壌(大部分は0~5cm)に分布

1 令和3年度(2021年)森林内モニタリング調査の結果

・1, 300箇所を調査

継続362箇所の平均空間線量率 $0.17\mu\text{Sv/h}$ (R2: $0.18\mu\text{Sv/h}$)

継続362箇所 $0.23\mu\text{Sv/h}$ 未満の区域は増加(42箇所(12%:H23) \Rightarrow 261箇所(72%:R3))

1. $0.00\mu\text{Sv/h}$ 以上の区域は減少(127箇所(35%:H23) \Rightarrow 0箇所(0%:R3))

- ・空間線量率はH23.8と比較して約81%減少
- ・空間線量率はCs物理学的減衰率とほぼ同じく減少
- ・立木や土壌のCs濃度は空間線量率と正の相関

2 木材内部のCs濃度

- ・木材内部のCs濃度は、スギは心材が辺材よりやや高い傾向

・辺材平均Cs濃度 51Bq/kg (R2: 44Bq/kg 、R1: 40Bq/kg)

・心材平均Cs濃度 83Bq/kg (R2: 65Bq/kg 、R1: 73Bq/kg)

- ・Cs最大濃度で木造住宅を建築した場合

年間追加被ばく量 0.050mSv (木材利用への影響なし) (R2: 0.050mSv 、R1: 0.035mSv)

※時間あたり被ばく量 $0.007\mu\text{Sv/h}$ (R2: $0.007\mu\text{Sv/h}$ 、R1: $0.005\mu\text{Sv/h}$)

3 葉のCs濃度

- ・全葉の平均Cs濃度 423Bq/kg (R2: 490Bq/kg 、R1: 330Bq/kg)
- ・平成25年度と比較して約96%減少。

4 広葉樹萌芽枝の放射性セシウム濃度

- ・萌芽枝のCs濃度は平成25年度から平成27年度に大きく低下し、その後は漸減傾向。
- ・コナラ萌芽枝のCs濃度の低減率は鈍化傾向

今後の調査内容

1 モニタリングの継続調査

森林内空間線量率の経年変化を継続して観測することにより、今後の林業活動へ向けての現状把握。

2 立木の放射性物質濃度を継続観測

林業生産活動における安全性を確保するため、立木の放射性物質濃度の経年変化を観測。